

地方創生イノベーションスクール2030

特別レポート

International Student Innovation Forum 2017 生徒国際イノベーションフォーラム2017 開催報告

2017年8月2～4日の3日間、「地方創生イノベーションスクール2030（以下、ISN2030）」の集大成として、「生徒国際イノベーションフォーラム2017」が開催された。海外8か国のパートナースクールの生徒約60人も含め、ISN2030参加校の生徒約220人が一堂に会し、それぞれ約2年間にわたって行ってきた実践を発表。さらに、参加生徒全員が国・地域が混在するグループに分かれて、意見交換を行った。様々な国や地域から集まった同世代と交流を深めた模様をレポートする。



開催概要

日程 2017年8月2日(水)～4日(金) **会場** 東京都 国立オリンピック記念青少年総合センター
参加者 地方創生イノベーションスクール2030参加校(生徒約220人、教員約100人)、研究者、OECD、大使館、企業、省庁関係者など

地方創生イノベーションスクール2030参加校

東北・ドイツ(ハール)クラスター

福島県立ふたば未来学園高校、福島市立福島第二中学校、福島市立岳陽中学校、福島市内高校、宮城県気仙沼高校、気仙沼市内中学校、Ernst-Mach Gymnasium

福井・シンガポールクラスター

福井県立敦賀高校、福井県立羽水高校、福井県立若狭高校、福井大学教育学部附属義務教育学校、Temasek Junior College

和歌山・トルコ・ドイツ(コンスタンツ)クラスター

和歌山県立田辺高校、和歌山県立日高高校、和歌山県立海南高校、和歌山県立星林高校、和歌山県立那賀高校、MEF International School、MEF National School、DARUSSAFKA、Wessenberg-Schule

広島・アメリカ・インドネシア・ニュージーランド・フィリピンクラスター

広島県立広島観音高校、広島市立広島工業高校、広島大学附属高校、広島県立広島国泰寺高校、広島県立三次高校、広島県立安古市高校、広島県立

吉田高校、広島県立呉三津田高校、広島県立西条農業高校、広島県立広島高校、尾道学園尾道中・高校、広島県立尾道北高校、広島県立福山明王台高校、Brooklyn Friends School、Scarsdale High School、Furr High School、Nanakuli High School、Cebu International School、Cebu City National Science High School、SMA Negeri 2 Lamongan、Pondok Pesantren Modern Darul Istiqamah、Hutt Valley High School、Te Ara Whanui Kura Kaupapa Maori、Te Atiawa Tribal Council

隠岐島前・エストニアクラスター

島根県立隠岐島前高校、Saaremaa Ühisümnaasium

高専クラスター

明石工業高等専門学校

ボランティアクラスター

埼玉県教育委員会、JEARN、東京学芸大学、ジャパンアートマイル、宮城県多賀城高校、Blue Earth Project

生徒たちが分担し、 国際会議の企画・運営を担う

東日本大震災で被災した東北の中高生を支援する教育プログラム「OECD東北スクール」の後継事業として、2015年8月にスタートした「地方創生イノベーションスクール2030（以下、ISN2030）」。「生徒国際イノベーションフォーラム2017（以下、本フォーラム）」は、ISN2030に参加する各クラスターの約2年間にわたる実践を共有し合い、2030年に向けて求められる教育のあり方を、生徒・教員・研究者らが国や地域を越えて協働しながら探ることを目的として開かれた。

本フォーラムの実行委員会は2016年12月に結成され、事務局は福島大学に置かれた。フォーラムのプログラムは、各クラスターの生徒が分担して企画・運営を担い、各クラスターの教員、福島大学や東京大学などの学生、事務局スタッフがサポートした。参加校は地理的に離れており、また海外の参加校もあったため、打ち合わせはウェブ会議システムやメールを利用して行われた。スムーズに進めることがなかなか難しい状況の中、ポスターセッション、開会式・閉会式、異文化交流会は、生徒たちがプログラムの内容を決め、各所との調整を進めた。当日も進行役を務めるなど、フォーラムそのものが生徒たちを大きく成長させる場となった。

日本語と英語で 自分たちの活動の全容を発表

1日目は、開会式と参加者の交流会、ポスターセッションの準備などが行われ、2日目に本格的な活動に入った。

2日目の午前中は、クラスターごと設けられたブースで活動を報告する「ポスターセッション」が行われた。各クラスターとも日本語と英語で制作したポスターを掲示し、見学者に応じて日本語または英語で説明。活動をまとめた映像をモニターで流すクラスターも多く見られた。どのブースも盛況で、生徒は交代で発表にあたった。

「結婚」をテーマにして人口減少にアプローチした島根県立隠岐島前高校は、本フォーラムの1か月前に地元で開催したイベント「世界の結婚観について知る」を中心に活動を報告。生徒は、切り口を「結婚」に決めるまでが大変だったと振り返る。

「人口減少の解決策にどこからアプローチするか、メンバーの意見がなかなかまとまりませんでした。私はこれまで、理由に納得いかなければ、自分と違う意見を受け入れられませんでした。でも、それでは議論が前に進みません。

プログラム

1日目	… 様々な国の生徒たちが交流し、関係を築くセッション
15:00	開会式
16:00	ポスターセッション準備
18:00	異文化交流会
19:30	グループワーク顔合わせ
2日目	… プロジェクトの成果発表と共有をし、どんな未来を築きたいのかを考えるセッション
8:30	ポスターセッション
11:00	グループワーク
14:30	グループワーク発表
15:30	ラウンドテーブル
18:30	異文化交流会
3日目	… 学びの振り返り、未来を築くために必要な力は何か、「学びのイノベーション」を議論するセッション
8:30	ポスターセッション
9:30	フォーラム
11:00	パネルディスカッション
13:00	閉会式

ポスターセッション

活動の成果、今後の展開などをアピール

クラスターごとに設けられたブースで、ポスターや映像を用いて、活動内容を発表。自ら課題を見だし、解決策を考えて取り組んできただけに説明する言葉に熱がこもる。どのブースも大勢の見学者が訪れ、ほかのクラスターの活動内容を真剣に聞いていた。



海外からの見学者がブースを訪れると、英語でのプレゼンテーションがスタート。映像も見せながら、自分たちの活動をPRした。何度も推敲したという英文の原稿は、読むポイントなどが書き込まれていた。

地元の特産品を無料配布してアピール

国内外から大勢の人が集まるフォーラムは、地元の特産品を広める絶好のチャンス。英語の看板を手に、銘菓や名水などを持って会場内を回る。



グループワーク

国・地域を越えたグループで、未来の課題に挑む

1グループ約10人で下記の①～⑥のテーマに分かれ、「Causes」(原因)、「Core Problem」(主な問題)、「Effects」(影響)を書き出し、「Problem/Solution Tree」(問題/解決策の樹)にまとめるというグループワークを通して、問題への理解を深めていった。

- ① Climate change (気候変動)
- ② Shaping energy (エネルギー問題)
- ③ Refugee and migrant crisis (難民と移民の危機)
- ④ Education in a fast-changing world (変わりゆく時代の教育)
- ⑤ Shaping the future of media (未来のメディアのあり方)
- ⑥ Global aging (世界的な高齢化)



各グループにファシリテーターと Language Support Staff がついたが、あくまでも生徒のサポート役。議論を深めようと、日本の生徒たちが、話し合いをリードしたり、自ら通訳を頼んだりする場面も見られた。



言葉は電子辞書を活用すれば何とか、どんな思いを持っているかが重要であることに、多くの生徒が気づいていた。



価値観の違いを受け入れ、意見をすり合わせ、みんなが納得できる答えを導くことの大切さを学びました」

和歌山県立星林高校は、和歌山市内にある景勝地「和歌浦」のPR活動に取り組んできた。今回は、来場者に和歌浦を少しでも印象づけようと、銘菓「和歌浦せんべい」を製造元に交渉して提供してもらい、会場で無料配布した。そして、英文の発表原稿は英語科の教員とALTに何度もチェックしてもらい、スムーズに言えるよう練習を重ねた。

「私は人前に出て話すことが得意ではありませんでしたが、この活動を通して発表する機会が増え、緊張せずに話せるようになりました。今では、自分で調べたことやアイデアをほかの人に伝えることに楽しさを感じています」

発表を聞く側も、自身の経験から活動の難しさを想像でき、相手に敬意を払って真剣に聞く。そして、自分たちの活動との類似点や相違点を見いだし、感想を述べたり、疑問点を質問したりしていた。

「問題/解決策の樹」をつくりながら、それぞれ考えを深めていく

2日目の午後は、クラスター混合の約10人で1グループとなり、「Climate change (気候変動)」「Shaping energy (エネルギー問題)」など6つのテーマについて議論する「グループワーク」が行われた。そのねらいは、多様な背景や価値観を持つ他者の考えを聞き、自身の考えを深めていくことだ。生徒が事前に選んだテーマを元にグループ分けをしている。「Education in a fast-changing world (変わりゆく時代の教育)」を選んだという生徒は、「海外の高校生から自国の教育に対する考え方をすることで、日本の教育について深く考えたい」と、期待を語った。

グループワークは、テーマに関する「Causes (原因)」「Core Problem (主な問題)」「Effects (影響)」について、各自の考えを付箋に書き、模造紙に貼って、「問題/解決策の樹」としてまとめるという形で進められた。海外の生徒が必ずいるようにグループ分けをし、使用言語は英語を基本とした。そのため、英語力に自信のない生徒が多いグループでは、議論が停滞することもあった。そうした場合には、英語が得意な生徒が通訳を買って出るなど、議論をリードする様子が見られた。また、各グループはファシリテーターと Language Support Staff がついており、多様な生徒たちを支援した。

約1時間の議論が終わる頃には、模造紙にびっしりと付箋が貼られ、様々な角度からの意見が連ねられていた。完成した模造紙は会場の壁に貼られ、その模造紙を見て回り、共感した意見にシールを貼るといふ、意見をシェアする時

間が設けられた。自分たちのグループと同じテーマの意見をじっくり見る生徒、友人がいたグループの模造紙を見て回る生徒など、思い思いに他者の意見に触れていった。

「アメリカ人からも日本人からも、学校で履修できる科目の選択肢が少ないという意見が出ました。アメリカの高校は自分が学びたいことを選べるのだと思っていましたが、『自由に学びたい』という気持ちは同じなのだと感じました」「自分の考えを英語で話し、相手の英語を聞き取るのは難しかったですが、同じテーマを選んだメンバー同士であり、国や地域が違って、何を言いたいのかがよく分かりました」と、生徒は感想を述べた。英語力も重要だが、何に関心を持ち、何を語るかが重要であることに、生徒は気づいたようだ。

一方、Language Support Staff を務めた日本の教員は、「日本人の生徒は、自分の考えを伝えたいという努力はうかがえましたが、あまり発言できていませんでした。その原因は英語での発言に慣れていないからであって、英語科教員として、授業でも課外活動でもそうした場を設ける必要性を改めて感じました」と、自身の指導を振り返った。

他者からの批判的な意見もしっかり受け止める

続いて行われたのは、「ラウンドテーブル」だ。ISN 2030での活動を各自で振り返り、自分にどのような力がついたのか、また、何が足りないと感じ、これからどのように活動していきたいのかを、生徒同士で語り合うグループワークだ。1グループ7～8人、クラスターが混在するようにして、約30のグループに分かれた。英語力に配慮して日本人のみのグループも設けられた。

生徒たちは車座になって座り、まず自己紹介からスタート。そして順番に自分の活動を紹介し、振り返りを語っていった。クラスターでの活動でも振り返りを語っていることもあり、生徒たちは皆、自身を客観的かつ冷静に振り返っていて、さらに活動へのアドバイスを求める姿も見られた。生徒たちは、振り返りを共有する中で、学校の授業では学べない力を活動を通して得て、自身が成長していることを実感したようだ。

「コミュニケーションやリーダーシップの取り方などは授業では教えてくれないという意見に、メンバー全員がうなずき、それならば、授業で学べない力を伸ばすためにはどうすればいいのか、話し合っていました」と、生徒は「ラウンドテーブル」の成果を語る。

ファシリテーターを務めた教員は、「どの生徒も、メンバーの振り返りに積極的に意見を述べていて、聞く側はそ

会場の壁一面に貼られた全グループの「Problem/Solution Tree」を参加者は見て回り、自分が共感した意見の付箋にシールを貼っていった。



「Education in a fast-changing world」をテーマに話し合ったグループの「Problem/Solution Tree」。「Never give up」「To have dreams for the future」など、様々な考えにシールが貼られていた。

いくつかのグループが話し合った内容を発表。英語による発表に自ら手を挙げて行った日本の生徒は、「以前参加したフォーラムではできなかったことにチャレンジしたいと思い、立候補した」と語った。



ラウンドテーブル

学びを振り返り、自身の成長と課題を語り合う

円形の段ボール「えんたくん」を囲み、約2年間の活動の振り返りを語り合い、聞き合った。メンバーの距離が近くて話が聞き取りやすく、気づいた点などは手元の「えんたくん」にどんどん書いていった。



思うように英語で言えずに、発言をためらう様子も見られたが、自分の経験を語ることは他者の学びにもなるのだと気づき、懸命に話そうとしていた。

フォーラム

「生徒共同宣言」の内容を議論

クラスターごとに集まり、前日に行ったグループワークやラウンドテーブルでの議論、そして約2年間の活動を踏まえて、ISN2030の思いを発信する「生徒共同宣言」の内容について意見を出し合った。



2日間の交流で、思いを言葉にして伝える大切さを実感した日本の生徒たちは、何とか英語で意見を発表していた。



パネルディスカッション

各クラスターの代表が意見を発表

鈴木寛 ISN 代表のファシリテーションによって、フォーラムで話合った内容をそれぞれの代表者が発表。宣言をより充実させるための意見が出された。



ステージのスクリーンには、参加者のコメントがリアルタイムに映し出され、会場の一体感を高めた。

れが批判的な内容であっても、真摯に耳を傾けていました。真剣に取り組んできたからこそ、活動をもっとよくしたいという思いが強いからでしょう」と、生徒が目輝かせて話す様子をそのように語った。

最後に、数名の生徒が話し合いでの気づきを発表した際、トルコの生徒が「自分の意見を堂々と言おう。英語を間違えてもよいではないか！」と発言。英語力とともに、語れる内容を持つ重要性に誰もが気づかされた言葉であった。

参加者全員で完成させた 未来への決意

3日目は、ISN2030の取り組みと本フォーラムを今後の活動に結びつける「生徒共同宣言」に向けて、クラスターごとに集まり、その内容を議論する「フォーラム」が行われた。2030年に向けて自分たちは何をすべきなのかをまとめた決意表明として、事前に、和歌山クラスターの生徒が原案を作成し、各クラスターからの意見を集約しながら何度も書き直して、本フォーラムでの提案に至った。

「宣言には、ISN2030の活動をしたからこそ分かったことや今後の思いを盛り込みたいと考え、各クラスターや関係各所から意見を募りました。自分たちで書かなければ私たちの宣言にはならないと考え、いただいた修正案を反映しつつ、納得いくまで書き直しました」と、和歌山クラスターの中心メンバーは振り返る。

宣言作成を支援した教員は、「生徒は、自分たちの考えと周りの意見と板挟みになり苦しんでいました。しかし、自らの力で誰もが了承する宣言文を書くしかありません。その経験が、調整力や精神力といった生きる力を育てています。教員は、生徒がその混沌から逃げずに進めるよう支援する度量を持たなければならないと思いました」と語る。

「パネルディスカッション」では、各クラスターの代表者が「フォーラム」で出された意見を報告。また、宣言を達成するために、「この3日間の体験を友人や家族らに伝えていこう」「学校での活動にも積極的にかかわり、変革の担い手になっていこう」といった提案もなされた。

3日間にわたる国と地域を越えた交流は、生徒に様々な変化をもたらしていた。「みんなで議論する大切さを伝えたい。自分の知らないことに気づくことができ、それを取り入れて改善もできる」「その場で意見をまとめて伝えるのは難しかった。回転力、瞬発力、訴求力を高めたい」「得意ではない英語も聞こうとすることで理解できた。英語の学習を頑張ろうという意欲が出てきた」という声があった。

広島クラスターの教員は、生徒の成長をこう語った。「昨年、アメリカのハワイで行ったフォーラムでの経験

をばねにし、英語力、発言力、積極性と、生徒は様々な努力していました。今回、どの生徒も積極的に発言していて頼もしく感じました。失敗も大きな経験になり、そのためには活動の場が必要です。そうした機会を提供することが、私たちの役目だと強く思います」

「生徒共同宣言」で 2030年に向けてすべきことを発信

閉会式では、生徒たちによってびっしりとメッセージが書き込まれたシンボルバルーンが掲げられ、各国の代表者が3日間の熱い議論を振り返り、感想を発表した。そして、和歌山クラスターの生徒3人によって、英文による「生徒共同宣言」が読み上げられた。その概要は次の通り。

——未来を担う私たちこそが、教育にイノベーションを起こしていかなければなりません。様々な困難な課題に自分事として向き合い、国や地域を越えて様々な立場・経験を持つ人々と議論し、努力を怠らず、行動することが大切です。困難や不安につぶされそうになっても、私たちには仲間がいます。仲間との信頼関係と目標を達成するという意志が、大きな支えとなるでしょう。この2年間で私たちは様々なことを成し遂げてきました。私たちの可能性を信じ、互いに手を取り合い、行動し、皆に幸せをもたらす地球全体のコミュニティー「地球村」を築いていきましょう。

すべてのプログラムを終了し、フォーラムは幕を閉じた。

フォーラムを終えて

「混乱」こそ、生徒が成長するチャンス

生徒たちのエネルギーに満ちあふれた3日間でした。英語と日本語が飛び交い、国や地域、学校を越えた交流が広がっていました。しかし、大勢の人が集まれば、混乱も起きます。それを周囲といかに協働して乗り越えるかが、生徒の成長につながります。果敢に議論をリードしようとした生徒もいれば、戸惑い黙ってしまった生徒もいましたが、そのどの生徒にとっても自分の課題を発見する場になったと思います。

国際協働がどういうことなのか、生徒も教員も皆、肌で感じました。その学びを生かして、次の行動に移してこそ、ISN2030、そしてフォーラムの真の成功といえます。引き続き、教育にイノベーションを興していきたいと思います。

生徒国際イノベーションフォーラム 2017
実行委員長、福島大学理事・副学長

三浦浩喜
みうら・ひろき



生徒が社会と主体的に関わり、学んでいくために

ISN2030での成果を存分に発揮し、生徒はフォーラムで生き生きと活動していました。日本人の生徒は海外の同世代と交流するために力を合わせて準備し、英語での発表をやり遂げました。それに加えて、一人ひとりが議論の場で質問や発言をし、議論に貢献していたか。これまでの学びを生かして、臨機応変に対応し、提案できたか。当日を振り返り、生徒は達成感と共に悔しさも語ってくれました。

2030年の社会での活躍に向け、生徒には地域の課題に主体的に関わり、意見の食い違いを乗り越えて、地域社会や国際社会でイノベーションを興してほしいと思います。そのためには生徒自身が学びのデザインに参画することが大切です。ISNはこれまでの成果と課題をふまえて、次のフェーズへと進んでいきます。

OECD日本イノベーション
教育ネットワーク事務局長

小村俊平
こむら・しゅんぺい



参加した各国の代表者が、3日間の感想を発表。ニュージーランドの代表者は、感謝の思いを込めて伝統芸能ハカを披露した。そして、来賓から講評をいただいた後、参加者全員で「We Are The World」を合唱し、閉会した。

